

刊夕日九廿月十



定価 一月五元 三月十五元 半年三十元 一年六十元
廣告料 五元 十元 二十元 五十元 一百元
印刷所 常新日報印刷株式会社
電話 六三〇番

オリナシ 秋 (3)

木津茂太郎

低い山を越えて行けば町です。灯の綺麗な町であります。町の方へ、町の方へと歩いて行くお豊と十吉の小さい姿。(段々遠くへゆく) 歸り道。二人は池のある所で右と左に別れる。お豊の家。お豊入つてゆく。お母さん、十ちゃんと一緒に待つて来たんだよ。母親おどろく。「十ちゃん、十ちゃんは何してたの?」『明日學校へ持つてくつて童謡を考へてたのよ』母親。「田圃に!」『さうよ!』『まあ!』さうして、お祭の日!太鼓の音、笛の音、たのしいお祭の日!— 數一の家。少年達——品太郎や政次や十吉や健藏や勝吉

やが縁真近い庭に立つてゐる。今日は學校は休みである、みんなさつぱりした着物を着てゐる。ここにこしてゐる品太郎(襟より上) 口角泡を飛ばして仲間にしやべつてゐる政次(半身)

ノート

新築祝ひには、火、煙、焼く燃えるなどの言葉をさけます。

利かん気が溢れてゐる談笑してゐる五六人の少年達(全景) カメラ移動して家の中へ、數一キチンと坐つて御飯をたべてゐる。お母さんが傍でお給仕をしてゐる。そのお母さんの横顔。村の道を歩く少年達。太鼓を打つ手。—そこからカメラ次第に離れる。神社の情景が段々畫面に現れて来る、笛を吹いてゐる男太鼓を打つ男、世話役たち、群れてゐる子供や若者たち。坂道。下の方から數一や十吉等があがつて来る。あがり乍ら政次と健藏

が口論をするつかみ合はうとする、他の者が双方を制してゐる。「仲直りしろや」と云ふ品太郎。「今日はお祭禮ぢやないかな」と云ふ數一。二人手を離す、仕方なく黙つて了ふ。十吉は政次に話し掛ける、政次うんうん云つて聞いてゐる。みんな神社へ来る。笛を吹く男の横顔(おぼろ)

一人の世話役(はん身) 十吉何時の間にかその群から居なくなつてゐる。「十ちゃんは何處へ行ったんだらう?」不審に思ふ品太郎。「ぼん」とい

二明日の献立—
【朝】ねぎ、むきみ、すまし汁
【晝】しばえびのたかどあへ
【晚】鶏肉、里芋、焼豆腐、人参のつべい、茶めし
その十吉は何處へ行つたらう……
彼はそこの處で矢張參詣に來たお豊と出合つ

二人はあらぬ方へ行く草茂る道を静かに登つて行くお豊と十吉。ふたりしつつかと手を組んでゐる。白い手と手。登つてゆく二人。神社— 政次坂を下りてゆく、いろいろの出店をひやかしてゐる品太郎や數一。

笑話

皮肉な客、微笑しながら「おいボーイさ、俺は蠅まで註文しなかつた筈だね」ボーイいとも落着きながら「へい、その代り、その代金は頂きませんで……へい」



常磐歌壇

大高富久太郎

おぎろなし青き海光に見呆れるわが心象も光の如し
ま青き海を貫きて流れてむ光をぞ見つ赤き川水

木村外科醫院

平町五丁目橋際
電話三〇九

専門
産科 婦人科 花柳病科
入院應需
井坂醫院
平町田町 電話五五九番

イヤ! 君!
いゝ冬服を求めたね
断然三二年型だよ
いやコレカネ!
例の……「ソレ」
正札堂さ

平町田町 電話五五九番

物質 一般 各種債券
三井質店
平町四丁目川岸 電話六〇六番

金銀
高價買入致します!
御修繕は技術に絶対自信を持つ弊店へ
ダイヤ堂
鈴木時計店 平驛前通り

毛糸の買時は今
十一月一日から一オンスに付一錢値上げ
ハシモトヤは御高い相場に關係なく御勉めして参りましたが、毛糸は益々御高く來月一日から値上げの事になりました今月中は舊値段で御勉め致します、どうぞ御早く御求め下さい
平町田町 合名會社 ハシモトヤ糸店 電話十四番

一冊の代金で御希望通りな五冊の雑誌が自由に讀める
川崎巡回文庫 電話六三〇番
(申込次第規則書進呈)

市原醫院
平町田町(電話一一四番)
内科、小兒科 市原卯太郎
外科一般、婦人科 市原陸郎
外科、梅毒、淋病 市原三三男
入院隨時

來平公演に先立ち

二三音楽家今晚放送

素晴しく美しい聲の持主と 絶讃さるゝ松原操嬢の全貌

既報昨日に來平公演する東都音楽界の花形松原操嬢、森尾比佐雄、山田千代子の三音楽家は午後八時から仙臺放送局で獨唱とチェロを放送する。一行を平町に迎える前にスピーカーを通じて

松原操嬢は明治四十四年三月雪國のエキゾチックな香り高い小樽の港街に孤々の聲を上げた、そして幾星霜東京音楽學校の本科聲樂部を了へて

現代樂壇の若き名花と云はれ新進ながら衆望を一身にあつめて確固たる地歩を占めてゐる現在である。昭和七年卒業と共に讀賣新聞社主催の都下六音樂學校の昭和七年卒業生新人の紹介競演大演奏會に母校を代表してステージを踏み先づ壓倒的讚辭を獲り得て

四千の聴集を狂喜せしめた松原嬢の聲は大變美しい、殊に高音部の發聲が素晴しく流暢であつて新進とはどうしても受けとれない、曲に對する理解も豊富で聽いてゐて聞ざわりがない、斯ふした長所は何人も持つてゐるものでなく昭和七年各音樂學校がそれぞれ樂壇に送り出した聲樂家中實に松原嬢を惜いて外に見出し得なかつた、傳統と美風を誇る東京音樂學校が校の名譽にかけて一九三二年樂壇に華々しくデビューせしめた

町長時代の思ひ出

伏見彦衛氏談

（その六）

自分は日頃餘り丈夫な方ではなく、何れおと云へば病弱な質であつた、こんな事では町の水先案内は務まらぬと考へて、可成り弓道に精出した、尤も弓は止四年の郡役所主席時代から

遺り出したのだつたが出張がちであつた爲め技巧は遅々として進まなかつた。それに別段正式に師匠を定めて精勵したのではないから、いはば自己流で、まぐれながら的に當れば流飲を下げると云つた調子、至つて稚氣満々なものであつた。

而し町長就任以來、健康を眞に留意する様になつて

から、亡くなられた飯田翁に多少指導を受け、幾分弓の大意も肯けたので、強健法としてのみならず、一つの精神修養の上からも、是非續け度いと念願が起り、毎朝五時に起床して、公園の矢場や水道課の矢場に日參した、弱いなながらも大病に罹らなかつたのは弓のお蔭と思つて居る。

スポーツの普及と云ふ様な事に就いては、自分が弱かつた丈に一層痛切に考へ

巡回診療班の折角な趣旨が未だ徹底せず

貧困者の利用が少い

既報救療事業に基き平署に常置された巡回診療自動車班は醫師なき村及び治療に不便な山村を巡回診療する外、平町を始め其他恩賜財團濟生會より治療券を交付された貧困者に對しては無事となつて居るが未だ遺憾

させられた、一度阿部政右衛門君や大森勇君等の肝煎りで、古川田甫の附近に五町歩のグラウンド建設が企圖され、山崎清三君が委員長になつて、着々其計劃が進行を見た際の如き、自分は町民の健康増進と共に町の繁榮策としても結構な企てと思つた、大いに張り込んで積りだつたが、其後財界不況の爲めに、此の計劃が中途挫折するに至つたのは今考へても實に残念であると思ふ。

植田の緑川氏が蔵書三百冊寄贈

石城郡植田町の材木商 緑川信夫氏は今回蔵書三百冊(時價四百圓)を菊田實業學校に寄贈した

櫻樹の移植費協議

既報日露戦役凱旋記念櫻樹保存會より平町役場に提出した新川改修工事による櫻樹移植費五百圓下附の陳情に關し来る卅一日午前十時より町役場會議室に於いて、局及び同會代表者が參集協議する事になつた

平町役場では來月一日より一週間日本圖書協會主催の圖書館デーに當り市民の圖書獎勵と圖書利用を宣傳する爲め平第一小學校内の平圖書館を一般に開放すると

平第一職員 平第一籠球の選手 小學校にては來月二十三日開催される濱三郡小學校教員籠球大會に出場すべく同校小林訓導を主將として練習を開始したがメンバーは左の如くである

入賞児童に御褒美

平第二小學校にては本日朝會に於て圖書及び手工品展覽會の入賞児童百五十名に對し各々賞品を授與した

古河の運動會 石城郡好間村古河炭礦會社では來月三日午前八時より小館グラウンドに於いて従業員慰安の秋季運動會を行ふ筈

二阪農會役員 石城郡三阪村農會では來る卅一日午後一時より村役場に於いて總會を開き役員の改選を行ふと

平町人專 回婚 九品寺前四二 松崎喜作氏(二四)好間村字内ノ草八六 松崎登代子(二二)仲間町七二 當時横濱市中區本牧町一四九四 岡崎義氏(三六)東京市四谷區坂町四六横地操(二八) 回死 六間門一八 當時東京市小石川區原町十 高橋幸技(二七)

平第一職員 平第一籠球の選手 小學校にては來月二十三日開催される濱三郡小學校教員籠球大會に出場すべく同校小林訓導を主將として練習を開始したがメンバーは左の如くである (A組) 小林、藤田、松本政、横田、松本正(補) (B組) 山口、井上、根本菊、上川、古川(補) 欠) 大谷

は來月十八九の兩日役場會議室に於いて農作物品評會を開催すべく目下審査長の人選中

平商の陸上競技種目

既場來る十一月一日午前十時より開催される平商業學校陸上競技大會の種目は百米、二百米、八百米、千五百米、走巾跳、走高跳、三百米、砲丸投、バレー、各學年對抗八百米リレーの十種目である

入賞児童に御褒美

平第二小學校にては本日朝會に於て圖書及び手工品展覽會の入賞児童百五十名に對し各々賞品を授與した

古河の運動會

石城郡好間村古河炭礦會社では來月三日午前八時より小館グラウンドに於いて従業員慰安の秋季運動會を行ふ筈

二阪農會役員

石城郡三阪村農會では來る卅一日午後一時より村役場に於いて總會を開き役員の改選を行ふと

平町人專

回婚 九品寺前四二 松崎喜作氏(二四)好間村字内ノ草八六 松崎登代子(二二)仲間町七二 當時横濱市中區本牧町一四九四 岡崎義氏(三六)東京市四谷區坂町四六横地操(二八) 回死 六間門一八 當時東京市小石川區原町十 高橋幸技(二七)

社告

來月一日を以つて本紙十週年に相當する爲め、讀者各位の知遇を深謝し、且つ將來の御援助を切願せん爲め、讀者招待映畫觀賞會の計劃あり、詳細は一兩日中に發表す。乞ふ待たれよ!

盟聯 日本代表小平氏 神の國に來平 運動に

平町に於ける神の國運動として「デモクラシーと帝國の前途」「基督教社會思想史」の著者小平國雄氏を招き材木町バプテスマ教會にては來月一日午後七時十五分より「世界の思潮と基督教」と題した南町裡日本基督教會にては翌二日同時刻より「現代の思想問題と基督教」と題する講演ある筈である。因に小平氏はブリストン大學卒業後久しく米國に在りて宗教上の教化善導に貢献し歸朝後は昨年ゼネバの第八回國際平和會議、宗教平和大會監督會、和蘭にラルンの融和會の三大會議に日本代表として出席最近の世界の動きに親しく觸れた新人である。

▽……來月一、二の兩夜
▽……二教會で獅子吼

▽……來月一、二の兩夜
▽……二教會で獅子吼

放火女房の陪審公判辭退

既報石城郡内郷村大字綴字堀坂二十五番地居住芳野廣次内縁の妻坂内クラ(四七)に對する放火事件は去る二十七日豫審の終決をなしたが

小平氏講演

平町のり會にては別項聯盟中央委員小平國雄氏が神の國運動に來平さるゝを好機とし二日午後一時卅分より日本基督教會にて例會を開き同氏の婦人の領土擴張と題する講演を傾聴すると

みのり會

本日陪審辭退を申出たので近日平支部公判廷に於て中島才判所長係り關口、竹内兩判事陪席上田檢事立會の下に公判開廷する事になつたと

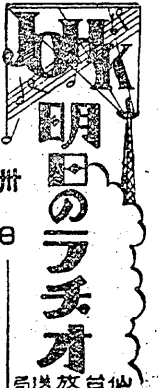
小林檢事は

茨城縣出身

明三十日赴任する

既報平區才判所檢事市川季熊氏の後任として白河區才判所から赴任する檢事小林傳松氏は明日平着午後三時五十三分にて到着されるが同氏は

茨城縣結城郡豊岡村の出身にて明治四十四年東京帝大法科卒後東京に於て暫く辯護士を開業大正六年一關區裁判所判事を振り出しに水澤、福島、酒



報後氣天 今晚も明日も北西の風晴れたり曇つたり

今晚の部

後六〇〇(子供の時間) 童話劇光の子演出胡蝶座 後六二五 英語講座 中等科三ノ六田部隆次 後七三〇 講演「續々日本はどうなる」法學博士 下村宏 後八〇〇 獨唱とチェロメソソングラノ松原操チ

明日の部

前九、一〇 榮養料理 里芋の味噌汁 燒豆腐と葱の煮汁 榮養研究所 前九、三〇 子供の時間

妻子を泣かす 不心得な亭主

平署に説諭願續出

石城郡好間村字小館三號居住機械夫岡部直之(五七)は去月女房及び二男一女を残して茶屋女と北海道に逃走し同村北好間の食肉行商安富熊吉(三三)も八月中香川縣の郷里に行くと稱して妻と二兒を残した儘行衛を晦し同村上野字一〇四果物商菅波建治(二八)は本月初旬平町古鍛冶町某カフェーの女給と墮落する等不心得な亭主の説諭願や搜查願が平署に續出する

好間炭礦の公休日

石城郡好間村古河炭礦會社では十一月中の公休日を三日、六日、十三日、廿日、廿七日の五日と決定されたが同村隅田川炭礦は需要期に入り採炭の能率を計る爲め三日位の豫定であると

火災に…… 同情して 白米を持寄る

既報石城郡澤渡村大字中寺字宿三五居住小泉瀧彌方では去る廿五日養蠶暖爐用の殘火から發火して全焼した際家具の全部を焼き目下一家五名の者は其の日の生活にも窮する有様なので昨廿八日同村下市萱區氏が白米を持寄り其他の日用品を寄附した

角力殺人 懲役六年

けふ言渡さる

既報石城郡小名濱町宇古港居住信夫郡笹木村生れ魚行商月山嘉信(三三)に對する殺人事件は本日午前十一時平支部公判廷に於て中島裁判長より懲役六年を言ひ渡された

平裁判たより

石城郡湯本町大字湯本字八仙十七號ノ九居住坑夫高津壽太(三三)は後備陸軍輜重兵特務兵なるが正當の事理なくして簡閱点呼に參會せず陸軍召集規則違反として科料十圓 同郡湯本町大字湯本字傾城十二番地倉島金重方尾形龜太郎(五八)は常磐線磐梯川鐵橋を通行し鐵道營業法違反として科料五圓に本日各々平區裁判所に於て略式命令を以て處分された

平職業紹介所報告

回人を求める方
△綿工見習 十六才 尋卒 月三圓外仕着(平町某)
△自轉車修理見習 十六才 尋卒 仕着小使(平町某)
△回職を求める方
△上工見習 十五才 高卒 給料面談(好間村某)
△自動車助手 二十二才 尋卒 給料面談(平町某)



【禁轉載上演及映畫】

第百八十七席

平

手造酒

悟道軒 圓玉演
近藤 紫雲畫

唯ぢや治らぬ子分達
洲の岡の政吉は笹川の身
内三人を鍋屋の店先まで見
送り、それからこの主人
に向つて

政「イヤとんだ迷惑をかけ
て濟まなかつたの、これは
皆の勘定とそれから壊れ物
もあつたやうだ、それ等を
兼ねて置いて行く宜いやう
にしておくんやないか」

と小判三枚置いて助五郎
の許に歸つて來てこの喧嘩
を話し

政「ねえ親分、この儘に捨
置くは善くねえと思ひます
何とか挨拶をしなければな
りませぬ」

と云ふ助五郎が頭を振つ

て
助「何アに構はねえ、彼奴
等が土地へ來て生意氣な事
を云やがるからだ、打棄て
置け」

と云つたが政衛は内心夫
では濟まぬと助五郎の許を
出ると其足で松岸の風窓の
半次の所へ來て俺は行き憎
いから何とかしてくれと頼
む、半次は心配する事はね
え俺に任せて置ふと云はれ
政吉は我家に戻つた、此家
は飯岡の身内、この事があ
つて以來、何れ笹川から止

返しに來るであらう、その
時には塵にしてしへ相談
が纏まり神樂獅子の五大郎
を始めとして難波重五郎、
地潜りの又藏荒濱の勘太、
茂村の野助、新井の定吉、
目明しの仙太、難波の勘太



木鼠の長太、山脇の權次、
新田の彌太郎、成田の甚藏
平尾の長吉、鰐の甚助等五
十餘名集まりました。とこ
ろで笹川の身内夏目の新助
が用あつて飯岡に出て來た
すると助五郎身内と繁藏の
子分三人が鍋屋で間違ひを
起したと其途中で聞いたか

ら、これは大變だと引返し
て繁藏に話し
新「飯岡では身内の者を集
めて居ると聞きましたが何
うします」

と聞いた時二階でメクリ
を引いてゐた若い者がドヤ
／＼降りて來たがこの話に
それ支度をしろと騒ぐ、平
手造酒はその時酒を飲んで
好い氣持で横になつて居た
餘り母家の方が騒々しいか
ら來て見るとこの始末、面
白い事が始まつた、それ押
して行くと煽り立てる、何
しろ氣の勝つてゐる若い者
の事とてワイ／＼騒ぐそれ

子分が迫々集まつて參り對
助に平手を入れ四十餘人に
なり造酒が先頭に立ちさア
出かけよう、ソレ行くと表
へ飛出す、その時繁藏が
繁「ヤイ皆待て、新助の
話では助五郎の身内が大勢
集まつて今にも此方から押
して行くかと待つて居ると
云ふが一體この喧嘩は誰が
種時さだ、それも判らねえ
内にワア／＼騒いだ所で仕
方がなからう」

此の一人の子分が
子「親分それは何でござい
ます、飯岡の祭りを見物に
行つた西尾の與一に六藏、
宇吉の三人が助五郎の身内
の爲に酷く打たれ傷を受け
て歸つて來ました、捨て置
いてはこの後どんな事をす
るか知れませぬ、そこでそ
の仕報しに行かうと云ふん
で」

繁「ウームうか、然し、
三人の命には別條はなから
う」
子「それは命にはさるや
うな事はございませぬが」
繁「それなら押して行くに
は及ぶめえ、今に何とか云
つて來るだらう」

云ふと平手が
造「イヤそれは一應尤もで
あるが今以て何等の挨拶が
ない先方の沙汰を待ち受け
るより當方より出向いて談
判いたした方が宜しからう」
繁「まア、今暫らく待つ
て下さい、如何に助五郎が
傲慢な奴でも此方の若い者
に傷を付けたを知らながら
笑つては居りますまい、何
とか沙汰があるでございま

せう……」
と止められて、これを振
り切つて行く事もならずそ
こで一同は助五郎よりの沙
汰を待つてゐた

食事
喫茶
一エフカ
番六四話電

印刷物の御用命
て總は命用御
會社株式印刷日每磐常
番三〇六話電

看護婦急派
の求めに應
じます
平町南町
平看護婦會
電話三〇七番

りん病
こしけ 永らく悩む人の福音
天下の名湯別府温泉で出來た無効返金責任藥
商標
別府林
全國知名新聞
こんなヨイクスリを未だ知らな
雑誌 推奨
い方がありませうか
右は岩里家古來よりの家傳秘法藥にして男女血らし
慢性淋病、こしけ、濁濁の病みは不思議に止り連服
するも絶對胃腸傷害なき各藥であります。
尚ほ此の藥は責任速効藥で二日内服して効なき時は
殘藥引換に全部異議なく返金します。
論より證據服藥した人は皆全快喜んで居ります。慢
性、悪性の人は七日以上服差して下さい。
付前金申込者には送料無代進呈、此の新聞各記入申込者に
代金引換廿三錢手数料金納の事。
藥價
急性用(黒箱) 一週分 參圓
慢性用(赤箱) 一週分 五圓
特約 平町古鍛冶町一〇
手販賣 阿康藥舖
縣社、下(電話四四番)

味覺の秋
骨ごとバリ／＼かじる
…小鳥のつけ焼…
中でウマイのはアオジロ、スズメ……
御酒によし御飯によし——御家庭にも一度
御試食を頂ます
鳥 菊
平町南町(電二八六)

近日賣出す發賣品は
満腹……?
一人前十五錢で満腹
平町三丁目
せ魚屋
電話六三三番